

# 古代エジプト王権の象徴としてのヘビについて

—ジエベル・タリフ・ナイフハンドルと自然崇拜—

大 城 道 則

はじめに

古代エジプト人たちは特定の動物を神聖視し、しばしばそれらを神として崇めてきた。しかしながら、古代エジプトにおける動物の持つ意味について、歴史学／考古学の視点から研究されることは稀である。まとまった研究としては、D・J・オズボーンの哺乳類についての研究書<sup>(1)</sup>、D・J・ブリューワーとR・F・フリードマンの魚類についての研究書<sup>(2)</sup>、そしてP・F・フリーハンによる鳥類についての研究書<sup>(3)</sup>が目立つ程度である。そのようななか、古代エジプトの動物を対象とした近年の研究として、北川千織のシカについての論考<sup>(4)</sup>、著者による先王朝時代の原始絵画のなかで描かれた動物たちを扱った論考<sup>(5)</sup>、そして澤井計宏によるそれぞれハヤブサとカメを扱った二つの論考が注目されるが、古代エジプトのあらゆる重要な局面でその姿を表すヘビを総合的に扱った論考は存在しない。決して古代世界においてヘビが重要ではなかったということではない。むしろヘビは様々な文化的コンテクストのなかで重要視されてきた。例えば古代ギリシアのヘビについてであれば、師尾晶子の「古代ギリシアにおける宗教と蛇」<sup>(7)</sup>というまとまった論考があるし、日本のヘビについてであれば、吉野裕子の示唆に富んだ画期的ヘビ研究の集大成である『蛇—日本の蛇信仰』<sup>(8)</sup>があるほどである。

なかでも古代エジプト王権におけるヘビの持つ意味は極めて重要である。そのことは第一王朝の王の一人がジエト（ヘビ）王という名前を持っていたこと、古代エジプト王権の象徴である聖蛇ウラエウスが第一王朝のデン王の象牙製ラベル上で王の額にすでに描かれていること、あるいは、「死者の書」のなかで描かれるファラオの敵としての大蛇アポピスの存在を挙げるだけで十分であろう。そのようななか、古代エジプトにおけるヘビを用いた最古の画像表現のひとつがジェベル・タリフ・ナイフ・ナイフハンドル（図1参照）なのである。本論はこのジェベル・タリフ・ナイフ・ナイフハンドルに描かれたヘビの画像を主な考察対象とし、古代エジプトにおけるヘビと王権との関係について述べた試論である。

### 第一章：ジェベル・タリフ・ナイフハンドルと二匹のヘビ

ジェベル・タリフ・ナイフハンドルは、複雑な文様が描かれたナイフの柄の部分だけではなく、通常失われていること<sup>(9)</sup>の多いフリントで作られた刃の部分までが残っている非常に保存状態が良好な資料として知られている<sup>(10)</sup>。複数の種類の動物たちが描かれた柄の左側部分の表面は、水平に四列に分けられており、同時代に製作されたデイヴィス象牙製櫛と同様に<sup>(11)</sup>一列ずつ方向が互い違いになって表現されている点をひとつの特徴としている。

図1に表された左側の面の一列目には大きな角を持つ鹿系の動物に襲い掛かる豹が、そしてその下の二列目には同じく種類の異なる鹿に襲い掛かるライオンの雄が描かれている。三列目では犬と思われる動物がアライクイのような動物に右前足を掛けている様子が描かれている。最後の四列目には翼を持つ想像上の動物とアイベックスか、あるいはバーバリー・シープと考えられている顎鬚を持つ動物が描かれている。前者の翼を持つ動物は、儀礼用パレットのひとつであるヒエラコンポリス・パレットの裏面に描かれたものと同じものである<sup>(12)</sup>。この動物とほぼ同じものと考えられる翼を持つ動物がメソポタミアのウルクから出土した円筒印章に描かれている<sup>(13)</sup>。これらの類似点は、背中に生えている翼にある。エジプトと

メソポタミアとの違いは、前者では四足で描かれるが、後者では鳥の如く二本足で描かれている点である。実際、魚を捕獲しようとする猛禽類をイメージしているのかもしれない。この円筒印章は紀元前四千年紀後半に年代づけられており、まさにこの時期はエジプトにおいて最初の統一王朝が出現する時期とほぼ重なる。明らかにメソポタミアからエジプトへの文化的影響の一例と言えるであろう。

このようなナイフハンドル上のメソポタミア的なモチーフの使用について、先王朝時代の業績が多い高宮いづみは、製作者がエジプト人であれ外国人であれ、ナイフハンドルという伝統的なエジプト製品の上にエジプトの美術的伝統を理解した職人が関わったのだと指摘している。<sup>(14)</sup> それぞれの動物の身体はまるでスクリーン・トーンを用いたかのごとく丁寧な紋様分けがなされている。そしてライオンの頭部前方とイヌの前方、そして翼を持つ動物の前方にはまるで空いたスペースを埋めるかのようにローゼット紋様が描かれ配置されているのである。<sup>(15)</sup>

もう一方の面には二匹のヘビが絡んだ様子が描かれている。同様の例はベルリン博物館象牙製ナイフハンドルやピートリ博物館ナイフハンドル<sup>(16)</sup>に描かれている。また少し構図は異なるが、二匹のヘビが絡む様子は、カーナーヴォン・ナイフハンドルやブルックリン・ナイフハンドルに描かれたゾ

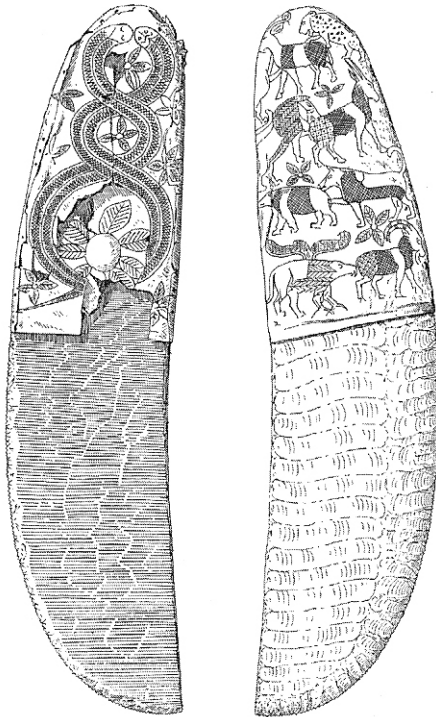


図1：ジェベル・タリフ・ナイフハンドル両面

ウの足元にもみられるのである。<sup>(17)</sup> 王朝時代のエジプトにおいて、ヘビはウアジェト神やアポピス神を代表とする神々として人々に広く知られているものであった。王権の象徴として王の被り物の額部に付けられるコブラの神ウラエウスも良く知られている。ウラエウスはしばしば偉大なる魔術師という意味のウエレット・ヘカウと呼ばれることもあった。<sup>(18)</sup> 他の蛇神としてはテーベのコブラの女神メレットセゲルやファイユーム地域で崇拜されたレネヌト神が良く知られている。<sup>(19)</sup> またアトウム神やアムン神が変身したアムン・ケムアテフ神がヘビの姿で表されることもあった。<sup>(20)</sup>

それらのなかでも特に蛇神ウアジェトは、上エジプトの守護神であるハゲワシの女神ネクベトに対応する下エジプトの女神であったため注目に値する。古来観念的には古代エジプトの領土は二分されており、ハゲワシとヘビの女神たちがそれぞれを支配していたからである。ウアジェト神を特に守護神とする下エジプトのプトは、先王朝時代においてはデルタ地域の首都であったと想定されているほど強力な都市であった。そこにおいて蛇神が人々に崇拜されていたのである。湿地の多いデルタ地帯であるために日常的にヘビが多く見られることだけではなく、ヘビは一般的に石垣の間や地面の物陰から現れるために、地下世界<sup>11</sup> 死後の世界と関連づけられていたのである。例えば夜の闇を凌駕し、女性と子供の守護神として知られているベス神が左手にヘビを掴み掲げながら口に二匹のヘビを噛む様子を描いた石灰岩製の枕の断片がデイル・エル<sup>11</sup> メディーナから出土している(図2参照)。<sup>(21)</sup>

夜に用いる寝具のひとつである枕は夜と密接に関係する品であり、枕を用いて眠る行為は古代エジプト人たちにとって最も死の状態に近いと考え



図2：左手にヘビを掴み口に二匹のヘビを噛むベス神

られていた。またへびは脱皮を繰り返すために容易に再生復活の象徴となったのである。そのことからへびは、人々の信仰の対象と成り易かったと思われる。実際、墓から出土する幾重にも連なる人間の脊椎骨はへびの姿、あるいはへびの骨と容易にオーヴァーラップする。

へびはまた一般的に人々に忌み嫌われる対象であるがゆえに、反対に強烈に神聖視され易いという特徴を持っている。例えばオーストラリアのワルラムンガ族の呪医は、へびを体内に招き入れることによって特殊能力を得ると考えられているし、シベリアのヤクト人の伝説によると、最初のシャーマンの身体はへびの塊でできていた。<sup>(22)</sup> 聖なる力を持つ呪医やシャーマンは、人々に避けられるへびと密接に関係していることがわかるのである。アイヌでは悪霊であるへびに取り憑かれた病人を救うためにキナシュツカムイと呼ばれる蛇神の模型を作り治療を行なうことが知られている。キナシュツカムイはへびの最高位にある靈魂であるため、自分の一族のなかで不埒なまねをしたへびを追放・抑制する力を持つと考えられていたのである。<sup>(23)</sup> 悪をさらなる巨悪でもって制するという構造がここにみられる。またユダヤ教の神ヤハウエの両足をへびとして描いた図像も知られている。<sup>(24)</sup> ヨーロッパでは薬局のマークとしてしばしば医学の神アスクレピオスの象徴としてのへびが使用される。<sup>(25)</sup> 中国春秋戦国時代の呉越の人々は、へびの肉を食べることを忌み嫌っていたが、もし子供が食べてしまった場合は、その子が成人してから吹き出物・瘡ができなかと考えていた。<sup>(26)</sup> これらは毒を以って毒を制するというアンビバレントな思考を反映したものであろう。忌避と神聖とは表裏一体なのである。聖なるものと禁忌なるものについて、民俗学者赤坂憲雄は異人の例を挙げ次のように述べている。<sup>(27)</sup>

「神異をあらわす人々は多くの場合、疾病や〈不具〉を負い賤形に身をやつしている。そこでの疾病・〈不具〉・賤形などは、〈聖〉なる痕（ステイグマ）であり、神と人との仲介者たる表徴または資格であった。言葉をかえれば、種々のレヴェルにおける〈異常性〉―障害・欠損・過剰などをそなえた〈異人〉は、それを聖痕として、神に遣われし者・神を背負い

し者・神に近き者へと聖別（それゆえ疎外）されたのである。そうした神と人間という二つの範疇にあいまたがり、媒介の様式を体现する「存在は、〈聖なるもの〉としてこのうえなく厳しい禁忌の対象とされた」

このように神聖なものとして人々に認識され、近寄り難い存在は、同時に禁忌なる存在として人々から遠ざけられたのだ。結婚式前夜に新婦を邪悪なヘビから護るために、金のヘビ<sup>28</sup>金の首飾りを身に着ける習慣が中国で知られている。同じようにヘビは生死に関わるその毒でもって人々に恐れられているが、その一方で脱皮を繰り返し再生復活する聖なる動物として古代エジプトにおいて崇拜されたのである。イランに伝わるホスローの財宝を守るヘビ<sup>29</sup>と同様に古代エジプトの伝奇物語である「セトナ・ハームス王子奇談<sup>30</sup>」の中でトト神の聖なる魔法の書物を護っていたのが、不死のヘビであったことはヘビの忌避と神聖という二面性を的確に表している。

## 第二章…世界のヘビ信仰

さらにヘビは古代エジプトのみならず時空を超えて世界各地で信仰対象として崇められてきた。古代世界におけるヘビ信仰やヘビのモチーフの使用に関する事例は枚挙に暇がないが、主としてジェベル・タリフ・ナイフハンドルと同じ絡み合う二匹のヘビに関する幾つかの例を以下に挙げておきたい。例えばヘビの図柄は、メソポタミアやエラムの緑泥石製容器に描かれることで良く知られている。<sup>32</sup>一人の英雄が両手で二匹のヘビをそれぞれ掴む場面や巨大なヘビが容器の側面を這うように取り囲んで描かれる場合が多い。同じように両手でヘビを捕まえる例として、ペンダント・トップにあしらわれたシリア・パレスティナの女神アシュタルトや古バビロニアの神ニルガルの画像<sup>34</sup>を挙げておきたい。彼女らは、エジプトでキップスと呼ばれるホルス神の幼少期の姿であるハルボクラテスを描いた小型石碑と同じように両手でヘビを掴んで

いるのである<sup>(35)</sup>。ラガシユのゲデア王のものと考えられている杯には、一本の杖に絡まるニンギシユジダと呼ばれる二匹のヘビが表されている<sup>(36)</sup>。シュメールの初期王朝期のものと考えられているイラクのテル・エス・スカイリ (Tell es-Sukhari) 出土のアラバスター製石像は、両膝をつきながら二匹のヘビを体中に巻きつけ拘束された英雄を表現している珍しい事例として知られている<sup>(37)</sup>。

上述したような古代オリエント世界で広く知られるヘビを制する人物とヘビに制される人物とのコントラストも興味深い<sup>(38)</sup>。クレタ島のクノッソス宮殿から出土した女神像もまた両腕に這わせたヘビを手で掴んでいる。争う二匹の蛇が絡み合ったヘルメス神の杖カドゥケウス (ケリュケイオン) も良く知られている。アステカの絵文書には祭壇の上でヘルメスの杖のように絡まる二匹の蛇神に捧げ物をする人物の場面が描かれている<sup>(39)</sup>。ケルト文化の影響を受けたロマネスク美術の傑作のひとつであるイギリスのキルベックの聖メアリと聖デビッド教会の入口扉の側柱には、絡み合うヘビをそのモチーフとして<sup>(40)</sup>。中国では建国神話的伝説に登場する人面蛇身の伏羲と女媧が知られている。女媧は大洪水を防いで国土を護つたと伝えられており、その功績により王位に就いたとされる伝説上の人物なのである。また日本の神社仏閣には、しばしば大きなもので長さ数メートルにもなる注連縄のような藁で作られた綱が掛けられている。これも本来は二匹の蛇が絡まる様子を表現していると考えられ、蛇の力により注連縄の内側と外側、つまり聖と俗とを隔てているのである。例えば東京都世田谷区の奥沢神社の注連縄は、巨大な蛇の頭部を持つことで知られている(図3参照)。また兵庫県淡路島にある磐座祭祀場のひとつである舟木石神座も御神体である巨大な岩と参拝者の空間とを縄が隔てている。淡路島は日本神話のなかでイザナギとイザナミによって最初に産みだされた島として知られていることから注目に値する。

先ほど古代エジプトの王権にヘビが関わることを紹介したが、エジプト以外の地域においても王権とヘビとの密接な繋がりをみることができる。特に英雄の誕生の場面にヘビが関連する例が知られている。例えばユーラシア大陸に巨大な王国を建てることを夢見たアレクサンドロス大王の誕生に纏わる話にヘビが関わる。アレクサンドロスは母オリンピアスが

ヘビと交わり生まれたという伝説を持っているからだ。後に初代ローマ皇帝となるオクタヴィアヌスもまた母親のアティアがアポロン神殿の輿の中で眠っている間にヘビと交わり生まれたとステトニウスは伝えている<sup>(41)</sup>。これらの話の類似例として漢の高祖劉邦は、母が沢の側で眠っている間に龍によって身籠ったという伝説を持っているのである。最古の龍はヘビと結びつくためヘビと龍は少なからず類似点があった。

そしてヘビと龍はその地域の歴史的背景と相まって時代と共に変化してきたため、両者を明確に区別することが困難な場合が多い。例えばバスク語のエレンスゲは意味合いがヘビに近く、スペインにおいても龍は大きなヘビを意味する。フランス語では龍という単語にヘビを当てることもある。デンマーク語で龍を表すレンオームは人の腕ほどの太さで空も飛べないのだ<sup>(42)</sup>。また劉邦の誕生譚に当てはめられ語られるようになったと考えられている日本の昔話の金太郎もまたヘビが父親なのである<sup>(43)</sup>。大江山の酒吞童子退治で知られる源頼光の家来であり、頼光四天王の一人であった坂田金時がモデルとされる金太郎は言うまでもなく日本の昔話における英雄の一人である。蝦夷征伐を行なった日本の英雄の一人坂上田村麻呂は、道中で湖に住む赤いヘビと関係を結び子供を得る<sup>(44)</sup>。同様に高麗、新羅、百済など東アジアの建国の祖は龍の子供であり、その伝承が王権の正統性の元となっている<sup>(45)</sup>。ヴェトナムでは14世紀頃まで、王は身体に龍の刺青を彫っていた<sup>(46)</sup>。王や英雄の誕生は常人とは異なるものでなければならぬという法則にヘビは必要とされたのである。

またアフリカのシャガンニー族に伝わる「ヘビの花嫁」という物語のな



図3：巨大な蛇の頭部を持つ奥沢神社の注連縄



かでは、ある部族の王子が魔法をかけられ、不本意にも河を支配する水の王様としてのヘビになる。<sup>(47)</sup> 中国夏王朝第二代目の王であった開は、二匹の青いヘビを耳飾りに着けていたと伝えられている。<sup>(48)</sup> 現在カンボジアのアンコール・ワットなどにみられるインドのコブラ神ナーガは、しばしば釈迦を守護する様子で表現されている。古代オリエントの王たちには玉座にヘビを伴う現象がみられる。<sup>(49)</sup> 類似例としてカメルーンのバムム族の権力者である裁判官が用いる椅子の脚部は複数のヘビの意匠で作られている。<sup>(50)</sup> 古代エジプトにおいても、あの世の王であるオシリス神となった死者の棺にオシリス神の玉座から身体を伸ばすヘビが描かれている例がある（図4参照）。<sup>(51)</sup> 古代世界において王権と蛇には密接な関係があったと言えよう。

王権を授かる運命にある英雄たちの出生に関わるヘビの存在は、ヘビの持つ強力な「精力」に原因があるのかもしれない。王は常に地上における最強者でなければならぬのである。何者にも負けてはならない存在であった。古代エジプトでは、王は世界の秩序「マアト」を保つ役割を担っていた。間違ひなくファラオは世界の中心だったのである。そのためヘビの精力を必要としたのかもしれない。古来精力の象徴であったヘビは、現代世界に暮らす我々にとつてでさえ精力剤として良く知られている存在である。イランの民話では、ヘビの頭部と尾を五寸ずつ切り取り、その真ん中の部分を煮た物を食べれば精力がつくと考えられている。<sup>(52)</sup> またある老人の力が10の頭部を持つヘビによって保たれ、ヘビの頭をひとつ切るとその老人の体力は奪われ、最後には死に至るといふ話が社会人類学者のJ・G・フレイザーによって紹介されている。<sup>(53)</sup> メキシコのチエチエンイツアの神殿のレリーフには、首を切断された人物の首から血のごとく複数のヘビが溢れ出している。ヘビは精力・生命の象徴であると同時に死の象徴でもあったのである。

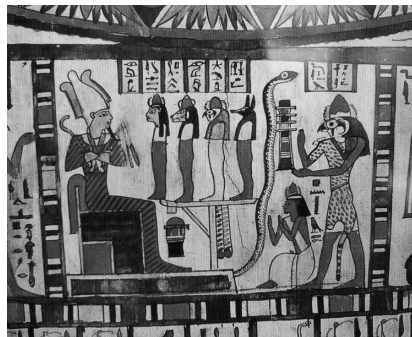


図4：オシリス神とともに木棺に描かれたヘビ

この両義性が最も顕著にみられる例が『旧約聖書』の「民数記」のなかに出てくるモーゼが作った青銅製のヘビの像である。ヘビに噛まれた者は、この青銅製の蛇像をみるだけで命が救われると考えられていたのである。<sup>(54)</sup>ヘビは病を癒す能力や薬と関係する存在でもあったのだ。東地中海世界において特に信仰された病気を治してくれる神であるアスクレピオスの象徴はヘビであった。メソポタミアの英雄ギルガメシュが苦勞の末手に入れた不死の薬草を盗んで食べたことにより、不死の生き物になったとされるヘビは古来生命力の象徴なのである。

ヘビは神々やその頭髮と強い繋がりを持っている。例えば先述したヘルメス神は二匹のヘビが絡み合う杖であるカドゥケウスを持ち、古代ギリシアの酒の神ディオニソスはしばしば頭部にヘビを着けた牡牛の姿で現れると人々に考えられていた。<sup>(55)</sup>頭髮が無数のヘビであり、みる者を石へと変えてしまう能力を持つゴルゴン三姉妹の一人メドゥーサなどが良く知られた存在である。<sup>(56)</sup>長野県藤内遺跡の16号住居址から出土した縄文中期の土偶の頭頂部にはとぐろを巻くヘビが着けられている。<sup>(57)</sup>奄美大島の祝女が従女の頭髮にハブを巻きつける例や宮古島の巫女が祭事の時にハブを頭髮に載せる事例も知られている。<sup>(58)</sup>紀元前一千年頃に栄えたアンデスのチャビン文化の神ランソンもまたメドゥーサのようなヘビを髪の毛として持っている。<sup>(59)</sup>シベリアのシャーマンが衣装に付けるリボンは「毛髪」と呼ばれるが、それは同時にヘビの意味を持つことが知られているし、トウングースではカフタンと呼ばれるマントの背中に吊り下げられたリボンをクーリン<sup>(60)</sup>ヘビと呼ぶ例がエリアードによって紹介されている。<sup>(60)</sup>頭髮の重要性は古代エジプトにおいても知られており、太陽神ラーの髪の毛は当時高価な宝石であったラピスラズリでできていた。さらにツタンカーメンのミイラの頭骨上には、金とファイアンス製のビーズで四匹のコブラを描いた亜麻布製の頭巾が被せられていたのである。<sup>(61)</sup>

ヘビはその細く長い体型と滑ったようにみえる身体から天空にまつわる自然現象との繋がりが見込まれている。例えばメキシコのマヤ文明の代表的な遺跡であるチエチエンイツアのククルカン神殿には、春分の日に真西に太陽が沈むとき、階段に沿って脇に作られたヘビにジグザグのうねる様な影が現れる。あるいはヘビは稲妻のメタファーであることから、天地を繋ぐ存在、つまり天と地を結ぶ道・綱の象徴となった。あるいは空に架かる虹のイメージをヘビは持っていたのかもしれない。実際、ゲール語で大蛇あるいは龍を意味するベヘル(Belch)には稲妻という意味もある。地域によって、ヘビは天に昇る龍と同一視された。またヘビは龍と同様に水のシンボルでもあった。「洪水を引き起こす龍」あるいは「七頭の大蛇」と呼ばれていたバビロニアのティアマトの例のように両者はしばしば混同されたのである。艶々濡れたように光る皮膚だけではなく、細長く波打つように動くその様子は激しい流水のメタファーとなったのである。ヘビを連想させる稲妻は雨を呼び、同じくヘビを連想させる洪水を引き起こすのである。マヤ文明のククルカンと同じく翼を持つ蛇神ケツアルコアトルもまたアステカ文明やその前文明であったトルテカにおいて水神であり風神でもあった。

以上のようなヘビの持つ稲妻や激しい水流のイメージは、世界共通の特徴と言えるかもしれない。ただし東アジアでは龍の存在がヘビを完全に脇役に追いやった。例えば我が国の例として神奈川県川崎市宮内の雨乞い行事がある。宮内では大正時代まで雨乞いのために角と髭を持つ約一〇メートルの龍を藁で作り、三〇人程の若衆がそれを担ぎ春日神社から多摩川まで練り歩いた。<sup>(64)</sup> シャカシャカ祭りと呼ばれる同様の例が奈良県橿原市の上品寺においても知られている。その他にも藁で作られたヘビや龍を用いる行事は日本各地で知られているのである。<sup>(66)</sup> また中国やインドにおいて龍は、王権や豊饒に深く関わるにもかかわらず、一方のヘビは、蛇蝎<sup>だかっ</sup>や蛇豕<sup>だし</sup>という言葉に象徴されるように、その毒のため人々に疎まれる存在となつていったのである。その上、中国においてヘビは早魃を引き起こす存在と考えられていた。まさに水を支配する

龍とはまったく反対の性質を持つことになるのである。中国最古の地理書である『山海経』<sup>せんがいきよ</sup>においては、「ここに大蛇あり、赤い首に白い身、その声は牛のよう。これが現れると、邑は大いに旱する」と記されている。<sup>(67)</sup>つまり中国においてヘビは負の要素を纏ったのである。<sup>(68)</sup>我々が日々の暮らしのなかで使用する水道水は蛇口で水の強弱を調節する。まさにヘビは水を自由自在に操るのである。世界的に水と密接に関係していたヘビは、中国を中心とする東アジアではその役割を龍に譲ったが、皮肉にも極東アジアの日本において今もなお「蛇口」という形を借りて水を制御し続けているのである。

上記の『山海経』の話の類似例として、嵐の神と戦う蛇神の神話が古代オリエント世界において知られている。西アジアあるいは古代オリエントで最も良く知られた蛇神であるイルヤンカは、紀元前二千年紀半ばに鉄と戦車によって繁栄したヒッタイト王国の神話に登場する巨大なヘビの神であった。<sup>(69)</sup>イルヤンカは天候神に打ち勝つが、その後殺される運命にある。二種類のストーリーが知られているイルヤンカ神話のひとつは次のように伝えている。戦いの末、天候神を倒したイルヤンカは、復讐を願う天候神に頼まれたイナラ女神によって住処の洞窟から酒と食べ物とによって誘い出された。同時にイナラ神は装身具を身に着け祭儀を行なっていると、ところをイルヤンカにみせたのである。祭儀で踊る女神をみながら酒を飲み干し酔って動けなくなつたところを蛇神イルヤンカは捕らえられ殺されるのである。まるでサノヲノミコトに退治される八岐大蛇を髣髴とさせる神話である。八岐大蛇も氾濫する河を例えた存在であったと考えられることもある。またこのイルヤンカ神話はサノヲノミコトの狼藉に怒り、天岩戸に隠れてしまった太陽神天照大神の話をも連想させる。おそらく



図5：太陽円盤の下部から顔を覗かせているウラエウス

世界中に存在する同じようなテーマを持つ神話と同様に雨のメタファーである天候神を破る蛇神イルヤンカは太陽を象徴する存在なのである。<sup>(70)</sup>

すなわち稲妻と流水⇨嵐を意味していたヘビは、同時に旱魃⇨太陽をも意味していたことになる。これは先ほど述べた「忌避と神聖とは表裏一体」という考え方と一致するものである。また古代エジプトにおいて太陽のなかから顔を出すヘビを表した図像が良く知られている。太陽神ラーやアテン神などを描く際に太陽円盤の下部からしばしば聖蛇ウラエウスが顔を覗かせているのである(図5参照)。

『山海経』やイルヤンカ神話にみられる蛇神⇨太陽神という考え方は、古代エジプトにおいても既に数千年前から存在していたのである。最終的にエジプトにおいて、第一王朝のジェット王はヘビそのものを自らの名前とし、新王国時代以降、エジプトのすべての神々のカーはヘビに宿ると考えられるようになるのである。<sup>(71)</sup>

#### おわりに

以上、本論ではヘビに注目し、古代エジプトとそれ以外の様々な地域の文化コンテクストのなかで、ヘビの持つ意味とその重要性を比較・確認してきた。本論を終えるにあたり、古代エジプト王権とヘビとの密接な関係を再確認した上で、ヘビの持つその文様に注目し、古代エジプト王とヘビとが持つ意味についてひとつの仮説を提案しておきたい。

ウラエウスについて先述したことからも明らかなように、ヘビは古代エジプト王権を象徴する存在であった。そのヘビを表す表象であるウラエウスは、王や王妃たちによって額に取りつけられたコブラの図像であり、魔術的な保護を意味する特殊な神である。それは、アミュレットなどとして身に着ける者の敵に対して炎を吹くと信じられていた。王位の象徴として、第一王朝のデン王治世に最古の例が確認されているが、以降もウラエウスは王権という観点から重要視され、第

二五王朝のヌビア人エジプト王は王冠に二匹のウラエウスを備え、プトレマイオス朝最後の女王クレオパトラ七世は三つのウラエウスを採用し、過去のエジプト王たちとの差別化を図ることに利用したのである。また王権の必須アイテムであるワス笏にもヘビの要素が確認できる。「細くて長い」という外観からの単純な類似性だけではなく、ワス笏の底が二又であるという特徴に注目するならば、それはヘビの二つに割れた舌、あるいは同じく二つあるペニスを連想させる。ヘビは聖蛇ウラエウスやツタンカーメンの黄金のマスク上にある蛇神ウァジエトの例を挙げるまでもなく、古代エジプト王権の象徴のひとつなのである。

古来、日本を含むあらゆる地域において、巫女の衣裳や装飾古墳の壁画、あるいは骨壺にも彫り込まれることもある連続三角紋（鋸歯紋）や連続菱形紋（ダイヤモンド紋）は、ヘビの象徴であるとみなされてきた。<sup>(73)</sup>吉野裕子は、台湾のパイワン族（高砂族の一派）や中南米のマヤ族などを類似例として比較検討した結果、日本の連続三角紋の襷を掛けた巫女の埴輪（図6参照）<sup>(74)</sup>を例に挙げ、弥生時代と古墳時代の巫女は蛇巫として、ヘビとなるために「蛇を着た」のだと結論づけている。<sup>(75)</sup>

連続三角紋がヘビを表現したものであるというこの発想自体は、それほど珍しくもないが、連続三角紋を身にまとうことによって、神に近づく存在＝蛇巫へと昇華するという吉野の見解は卓見で



図6：連続三角紋の襷を掛けた巫女の埴輪

ある。実は古代エジプト王が身に着けるベルトや衣服に連続菱形紋が使用されることがある(図7参照)<sup>(76)</sup>。ファラオの王冠の正面に据えられた聖蛇(ウラエウスやウアジェト(そして先述したツタンカーメンのミイラの頭骨に被せられた四匹のコブラを描いた亜麻布製頭巾))と身体や腰に巻き付いたへびの胴体は、古代エジプト王が「へびの化身」でもあったことを証明している。

さらに日本の装飾古墳内に描かれた連続三角紋や連続菱形紋には、赤色が用いられていることが多い。この点に関しても、吉野は諏訪大社で崇拜されているミシャグチ神の依代としての神使が赤衣を着装していたことなどから、ミシャグチ神は赤蛇であるとし、赤色の代表である太陽との強い結びつきを提案している<sup>(77)</sup>。著者は「太陽」と「へび」という二つから、古代エジプトの太陽神ラーを連想せずにはいられない。図像として描かれる際のラーは、太陽円盤にへびをともしながら、太陽神ラーの息子と考えられていた古代エジプト王たちは、へびの文様を身に纏うことによって、さらにその繋がりを主張し、王権の強化を目指したのである。



図7：衣裳に連続菱形紋が用いられた  
第1王朝の象牙製王像

- 1) D. J. Osborn, *The Mammals of Ancient Egypt* (Warminster, 1998)
- 2) D. J. Brewer and R. F. Friedman, *Fish and Fishing in Ancient Egypt* (Cairo, 1989)
- 3) P. F. Houlihan, *The Birds of Ancient Egypt* (Warminster, 1986)
- 4) C. Kiagawa, On the Presence of Deer in Ancient Egypt: Analysis of the Osteological Record, *Journal of Egyptian Archaeology* 94 (2008), pp.209-222.
- 5) 拙稿「古代エジプト先王朝時代におけるナイフハンドルの動物図像についてーナイル河谷の動物たちと原風景ー」『Biostory』十一(二〇〇九)「八ー九」一頁。
- 6) 澤井計宏「古代エジプトにおけるカメに関する一考察」『エジプト学研究』十六(二〇一〇)「七八ー一〇五」頁、同「古代エジプト先王朝時代におけるハヤブサの神格化の過程について」『エジプト学研究』十七(二〇一一)「一一四ー一三九」頁。
- 7) 師尾晶子「古代キリシヤにおける宗教と蛇」『国府台経済研究』十八(二〇〇七)「一一五ー一四五」頁。
- 8) 吉野裕子「蛇ー日本の蛇信仰」講談社、一九九九年
- 9) D. C. Patch, *Dawn of Egyptian Art* (New York, 2011), p.142-Cat.117.
- 10) B. Midant-Reynes, *The Prehistory of Egypt: From the First Egyptians to the First Pharaohs* (Oxford, 2000), p.239-fig.17.
- 11) D. Wengrow, *The Archaeology of Early Egypt: Social Transformations in North-East Africa, 10,000 to 2650 BC* (Cambridge, 2006), p.179-fig.9.2; W. C. Hayes, *The Scepter of Egypt I. From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom* (New York, 1990), p.28-fig.20; Patch, *op.cit.*, p.197-Cat.178.
- 12) Patch, *op.cit.*, p.139-fig.37a.
- 13) Wengrow, *op.cit.*, p.192-fig.9.8.
- 14) 高宮いづみ『エジプト文明の誕生』同成社、二〇〇三年、一一六ー一一七頁。
- 15) 拙著「古代エジプト文化の形成と拡散ーナイル世界と東地中海世界ー」『ミネルヴァ書房』二〇〇三年、七二頁。
- 16) H. S. Smith, *The Making of Egypt: A Review of the Influence of Susa and Sumner on Upper Egypt and Lower Nubia in the*



- 4<sup>th</sup> Millennium BC, in R. Friedman and B. Adams (eds), *The Followers of Horus-Studies Dedicated to Michael Allen Hoffman 1944-1990* (Oxford, 1992), p.243-fig.37 拙著、二〇〇三年、七一頁-図三十一。
- (17) Patch, *op.cit.*, p.154-Cat.131.
- (18) G. Pinch, *Magic in Ancient Egypt* (London, 1994), p.11.
- (19) I. Shaw and P. Nicholson, *British Museum Dictionary of Ancient Egypt* (London, 1995), p.245 (イアン・ショー&ポール・ニコルソン著、内田杉彦訳『大英博物館古代エジプト百科事典』、原書房、一九九七年)。
- (20) *Ibid.*, pp.32, 45.
- (21) Pinch, *op.cit.*, p.43-fig.24 M・ビアブライヤー著、酒井傳六訳『王の墓づくりびと』学生社、一九八九年、九〇頁。
- (22) シルチア・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム』上、筑摩書房、二〇〇四、一〇七、一四一頁。
- (23) N・G・マンロー著、B・Z・セリグマン編、小松哲郎訳『アイヌの信仰とその儀式』、国書刊行会、二〇〇二、一五〇-一五五頁。
- (24) ジョゼフ・キャンベル著、青木義孝、中名生登美子、山下主一郎訳『神話のイメージ』、大修館書店、一九九一年、荒川紘『龍の起源』、紀伊国屋書店、一九九六年、五八頁。
- (25) 村越愛策監修『世界のサインとマーク』世界文化社、二〇〇二年、一二二頁。
- (26) 姜彬著、新島翠訳『長江下流域における古代の蛇トテム崇拜の遺習』『日中文化研究』二(一九九二)、七〇頁。
- (27) 赤坂憲雄『異人論序説』筑摩書房、一九九二年、一二二頁。
- (28) 姜彬、前掲論文、七二頁。
- (29) A・J・ハーンサリー、サーデク・ヘターヤト著、岡田恵美子、奥西峻介訳『ペルシア民俗誌』平凡社、一九九九年、三〇八-三〇九頁。
- (30) W. K. Simpson, *The Literature of Ancient Egypt: An Anthology of Stories, Instructions, Stelae, Autobiographies, and Poetry* (New Haven, 2003), pp.453-469.
- (31) 例えば古代ヨーロッパにおける蛇を象った遺物については次の文献を参照。M・ギンブタス著、鶴岡真弓訳『古ヨーロッパの神々』言叢社、一九九八年。
- (32) J. Curtis (ed), *Early Mesopotamia and Iran: Contact and Conflict c.3500-1600BC* (London, 1993), plates I, 15, 16.

- (33) G. Hart, *Dictionary of Egyptian Gods and Goddesses* (London, 1986), pp.35-36. H・クレメンゲル著、五味亨訳『古代シリアの歴史と文化』六興出版、一九九一年、一四七頁―図15、一四九頁―写真42。
- (34) J. Black and A. Green, *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia* (London, 1992), p.136-Fig.112.
- (35) E. Teeter, *Ancient Egypt: Treasures from the Collection of the Oriental Institute University of Chicago* (Chicago, 2003), p.103-53.
- (36) J. Black and A. Green, *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia* (London, 1992), p.167-Fig.139. 増田精一「オリエントの龍と蛇」、『アジア民族造形文化研究所編』『アジアの龍蛇―造形と象徴―』、雄山閣、一九九二年、一八二頁―図7、キャンベル、前掲書、二八七頁・図二五―二五二。
- (37) Curtis (ed), *op.cit.*, XI.
- (38) 以下の文献参照。K. Tazawa, *Syro-Palestinian Deities in New Kingdom Egypt* (London, 2009).
- (39) キャンベル、前掲書、二九三頁、図二六三。
- (40) 拙稿『英国キルベックの聖メアリと聖デビッド教会』、『関西大学西洋史論叢』第一号（一九九九年）、四三―四四頁。
- (41) 大林良太『北の神々南の英雄』小学館、一九九五年、一八九頁。
- (42) 竹原威滋編『世界の龍の話』三弥井書店、一九九八年、一七四、一八九、一九七、二〇七頁。
- (43) 鳥居フミ子『金太郎の誕生』、勉誠出版、二〇〇二年、一八三―一八四頁。
- (44) 大林、『北の神々南の英雄』小学館、一九九五年、一二五頁。
- (45) 竹原威滋編『世界の龍の話』三弥井書店、一九九八年、六三頁。
- (46) 大林、前掲書、二三〇頁。
- (47) 松村武雄編『アフリカの神話伝説Ⅰ』名著普及会、一九七九年、一六一―二〇八頁。
- (48) 井本英一『十二支動物の話―子丑寅卯辰巳篇』、法政大学出版局、一九九九年、二九六頁。
- (49) 増田、前掲論文、一八一頁―図5、藤井純夫『西アジアにおける王座の形式とその坐法について』、『深井晋司博士追悼―シルクロード美術論集』、吉川弘文館、一九八七年、七―八頁。
- (50) J・E・リップス著、大林良太、長島信弘訳『鍋と帽子と成人式―生活文化の発生―』八坂書房、一九八八年、二三〇頁。

- (51) K. Mysliviec, *The Twilight of Ancient Egypt* (New York, 2000), Plate III.
- (52) ハーンサーリー、ヘターヤト、前掲書、一三八頁。
- (53) J・G・フレイザー著、吉川信訳『初版金枝篇』下、筑摩書房、二〇〇三年、三九一―三九二頁。
- (54) ミシエル・バストゥロー著、松村恵理、松村剛訳『王を殺した豚王が愛した象：歴史に名高い動物たち』、筑摩書房、二〇〇三年、十三頁。
- (55) 荒川、前掲書、九〇頁。
- (56) J. Boardman, J. Griffin and O. Murray (ed.), *The Oxford Illustrated History of Greece and the Hellenistic World* (Oxford, 2001), plate facing p.281-e.
- (57) 安田喜憲『大地母神の時代―ヨーロッパからの発想―』、角川書店、一九九一年、一〇二頁―図4、荒川、前掲書、一三五頁。
- (58) 萩原秀三郎『シャーマニズムから見た龍蛇と鳥と柱』、安田編『龍の文明史』八坂書房、二〇〇六年、二六四頁。
- (59) 安田「龍の文明史」、安田編『龍の文明史』八坂書房、二〇〇六年、五七頁。
- (60) エリアーデ、前掲書、二六三、二九九頁、小鹿野健『竜神伝説』、近代文芸社、一九九九年、二五一頁。
- (61) 河合望『ツタンカーメン少年王の謎』集英社、二〇二二年、七六―七七頁
- (62) 竹原、前掲書、一四七頁。
- (63) 荒川絃、前掲書、四五―四七頁。
- (64) 川崎市市民ミュージアム編『川崎の民俗―水と共同体（水の村）』、川崎市市民ミュージアム、一九八八年、六三―六七頁。
- (65) 竹原、前掲書、三〇頁。
- (66) 金田久璋「龍蛇と宇宙樹のフォークロア」、安田編、前掲書、三〇―三〇七頁。
- (67) 荒川、前掲書、二六頁。
- (68) しかしながら中国では水との関係を示唆する土器に蛇魚紋が描かれる例も知られている。飯島武次「夏王朝二里頭文化の刻画紋・刻紋・貼付紋土器」『駒澤大学文学部研究紀要』第六五号（二〇〇七）、六一頁―第15図。
- (69) T. Bryce, *Life and Society in the Hittite World* (Oxford, 2002), p.215.
- (70) アイヌの口承叙事詩であるユーカラで描かれる英雄アイヌラックルの日の神を岩の中に閉じ込めた魔人を退治する話も同類と考

えられる。イルヤンカについては、次の文献を参照。上田耕造、入江幸二、比佐篤、梁川洋子編著『西洋の歴史を読み解く―人物とテーマでたどる西洋史―』見洋書房、二〇一三年、一六一―一八頁。

(71) 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』、岩波書店、二〇〇四年、七三四頁。

(72) 山下真里亜『クシユ系』第25王朝における王権と女性』『駒澤大学博物館学講座年報』二〇一三年度、二八頁。

(73) 吉野裕子『蛇―日本の蛇信仰―』講談社、一九九九年、一九五頁。

(74) 原田淑人『古代人の化粧と装身具』刀水書房、一九八七年、九五頁―一二一。

(75) 吉野、前掲書、一九四―一九八、二八―三〇頁。

(76) A. J. Spencer, *Early Egypt: the Rise of Civilisation in the Nile Valley* (London, 1993), p.75-fig.52. 中野智章『古代エジプトの王権研究における新視点―王像のベルトに記された王の独占文様―』、屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社、二〇〇三年、六一―七五頁、拙稿『原始絵画から読み解く古代エジプト文化―ジュベル・エル・アラクのナイフハンドルとメトロポリタン美術館ナイフハンドル―』『駒澤大学文学部研究紀要』第六七号、二〇〇九年、六三、六八頁。

(77) 吉野、前掲書、二七二―二七四頁。